AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

看護研究集録 (2019.7) 平成30年度:29.

尿路ストーマを造設して自宅退院した高齢患者への退院支援―家族の支援が期待できない事例を通して―

西山 菜津実, 永井 佑奈

尿路ストーマを造設して自宅退院した高齢患者への退院支援
―家族の支援が期待できない事例を通して―

旭川医科大学病院　7階西ナースステーション
〇西山菜津実　永井佑奈
キーワード：高齢者、尿路ストーマ、自己効力感

【はじめに】B病院の尿路ストーマ造設患者の平均年齢は75歳であり高齢者が多い。家族支援を得て退院する患者が多いが家族支援がなくても自宅退院した事例を経験した。

【目的】家族支援は無いが、自宅退院した尿路ストーマ造設高齢患者への効果的な退院支援について明らかにし、今後の看護の示唆を得る。

【方法】回腸導管造設術後自宅退院した80代の患者1事例について、看護介入及び患者の言動を抽出し、データをコード化し内容毎に分類し分析する。

【倫理的配慮】患者に研究目的・方法を説明し、参加は自由であり参加を拒否した場合でも不利益は生じない事を紙面で説明し、同意を得た。所属施設倫理委員会の承認を得た。

【結果】53のコード、24のサブカテゴリー、10のカテゴリーを抽出。カテゴリーは「手技獲得の意欲」「退院後を見据えた社会資源導入」「ボディイメージの受容」「ケア習得からみる高齢者の特徴」「手技の自発的な確認」「ケアへの不安」「達成度の客観的な自己評価」「退院への課題に対する多職種との連携」「目標達成が実感できる介入」「高齢者の特徴を踏まえたケア」であった。

【考察】患者は、術前からDVD等で他人の行動を観察し、術後の自分の身体に起こる変化の代理体験をした。また短期で達成出来る目標を段階的に設定する介入が、自分でケアが出来るという成功体験に繋がった。更に、看護師が肯定的に評価する介入も自己効力感を高める一因となった。患者が抱くケアに関連する不安は、自己効力感の低下する要因となるが、難しい手技は他者の援助を得て解決するという視点を変える働きかけにより不安の軽減ができた。患者は、自身の手技獲得状況を評価する言語的説得ができ、支援を受けることを考え自ら相談出来る強みがあった。バンデューラの4つの情報源に働きかけることで自己効力感を高め、概ね手技獲得ができた。早期から退院後の課題について他職種と連携を図った結果、訪問看護を導入し自宅退院ができたことが明らかになった。

【結論】高齢で周囲の支援が無い状況にあっても自己効力感を高める看護介入が患者の主体的な手技獲得に有用であった。退院後の生活課題を見据えて早期から多職種との連携を図る介入が自宅退院に繋がった。